宗像

秋季大祭斎行

▲海上神幸「みあれ祭」

一日の「みあれ祭」で宗像三女神をお迎えし始まった秋季大祭も、三日の高宮神奈備祭まで、日・月・火曜日というウイークデー中心であったにも関わらず、連日多くの参拝者で終日賑わいました。

九月十七日

◆沖津宮神迎え神事◆

みあれ祭に先立ち、事前に沖津宮（沖ノ島）の御神璽を中津宮へ奉安する神迎えの神事が、九月十七日高向権宮司以下神職五名が渡島し斎行された。

前日の十六日に大島に渡島し、参籠した後、一行は翌朝沖・中両宮奉賛会関係者、沖ノ島仲間らと共に沖ノ島へ渡島。朝から雨で、海上は二、五トルの時化であったが、沖津宮御神璽を無事中津宮本殿に奉安した。

▲今年も参列された吉村作治早大教授

▲辺津宮に入御される三宮の御神璽

11月祭事暦

毎月1・15日 月次祭（つきなみ）
午前10時
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社
月命日祭（1日）
巡　　拝（15日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

3日 明治祭
午前10時～

23日 新嘗祭
午前11時～

余滴

宗像大社拝殿右側に「鶏卵燈篭」が奉納されている。燈篭裏面銘文によれば、「白蝋石燈篭」と刻まれた石灰岩で出来た大理石の燈篭である。▼年号を見ると明治十二年六月吉祥日とあり、また宗像神社史附巻によると「筑前宗像鶏卵荷主赤間村出光運平以下二十七名、及び鐘崎・神湊・大阪世話掛・船頭衆等、邊津宮拝殿南横に大理石の石燈篭を奉建す」とある。これにより明治初期、産業の開拓として生産農家や輸送業者が「宗像たまご」の生産にどれだけ期待を寄せ、燈篭を奉建されたのかが窺える。今でこそ、技術の進歩により養鶏の飼育設備が普及しているが、当時は農耕のかたわら、飼育に骨身を惜しまぬ努力を続けたことであろう。▼現在では地鶏と称し各地の特産品となっているが当地では、お祭りの後や来客があった場合、この鶏卵・母鶏を使った鶏のすき焼き「とりすき」でもてなす伝統が残っている。▼この伝統の意義を子々孫々と伝えていく事で、宗像地域の更なる発展に繋がっていくことだろう。境内には奉建から百年以上経った今でも先人達の思いが込められた「鶏卵燈篭」が美しい斑紋を見せている。（S・F）

神具・装束　結婚式場調度品
井筒
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家　匠の技
総合建築業　株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025　電話(0940)32-2567

十月一日
◆みあれ祭◆

明け方に少し雨が降り、生憎の曇り空の下での斎行となったが、午前八時三〇分、中津宮（大島）で出御祭が斎行された後、大島小学校鼓笛隊の演奏に併せ、沖・中両宮の神輿が大島港まで御神幸した。

一方その頃、宗像市田島の辺津宮でも午前九時に出御祭が斎行され、辺津宮御神璽が神湊港へと出御された。

午前九時三〇分、花火の合図とともに沖・中両宮の神輿を乗せた御座船が、『波切り御幣』『紅白の吹流し』『大漁旗』で飾った約四〇〇隻の大船団に守られながら出港。幾筋もの航跡を残しながら、玄界灘を順調に進み、曇天ではあったが、上空にはヘリコプターが何機も舞い取材を行った。

今年は日曜日となり、神湊の波止場、頓宮には既に多くの見物人が殺到、午前九時過ぎには車は入れない状況であった。神湊港沖で三宮の御座船は停船。供奉してきた各船は、順次三宮の御座船を一周し各港へと帰り、一年振りに宗像三女神はお揃いになった。

そして三宮の神輿を前に、頓宮祭を斎行（雨の可能性があった為、玄海魚市場で斎行）。御座船奉仕者に感謝状と記念品が贈呈された。

その後、白手袋、マスクをつけた神職が、神輿に奉安されていた御神璽を捧持し、三台の御座車で、辺津宮まで陸上神幸、正午過ぎ無事に辺津宮に到着した。

到着後、三宮の御神璽は辺津宮本殿内陣の三座にそれぞれ奉安。ここから秋季大祭が始まり、一日祭（入御祭）では保存会々員の奉仕で主基地方風俗舞が奉納された。

十月二日
◆流鏑馬神事・翁舞◆

二日午前八時からは流鏑馬神事が宮木貞彦氏らにより奉納され、烏帽子と直垂姿に威儀を正した射手に神馬がお祓いを受け、神門前に設けられた馬場道を疾走。地上七メートルの的に向けて、次々と矢を射ると拝観者から盛んな拍手が起こっていた。

午前十一時からの二日祭では、福岡市の喜多流（梅津忠弘氏門下）社中の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞を一目見ようと詰めかけた多くの参拝者は、風雅な舞にしばし見入っていた。

▲二日目の翁舞

▲一日目の主基地方風俗舞

十月三日
◆浦安舞◆

三日は午前十一時から三日祭が斎行され、地元玄海中学二年生の女生徒四名による浦安舞が奉納され、十二単を着装し、緊張した面持ちで檜扇（ひおうぎ）と鈴を手に舞う姿は、拝殿に詰めかけた多くの参拝者を魅

▲流鏑馬神事

▲氏子会奉幣使 高取利行氏

▲浦安の舞奉仕の玄海中学校二年生

了した。

この三日祭終了後には、高宮、第二宮、第三宮、宗像護国神社に奉仕神職、参列者がそれぞれに分かれ、秋季大祭が執り行われた。

午後二時からは、拝殿で南坊流瀧口社中による献茶祭も奉仕された。本年は約二十名が昇殿し、瀧口宗芳氏による見事なお点前が披露された。

▲瀧口宗芳氏によるお点前

△悠久の舞(高宮神奈備祭)

◆高宮神奈備祭◆

そして午後六時からは高宮で、昨年六三〇年振りに復興された秋季大祭を締め括る高宮神奈備祭が、神島宮司以下神職・巫女、太宰府天満宮神職・巫女十三名、小林栄二会長以下氏子青年会員約三十名の総勢約五十名の奉仕で斎行された。

今年の新たな取組みとして、当大社古記録に登場する「あおつみの餅」を再現し、記録通り五枚の小判型の餅をお供えすると共に、奉仕者が斎館前から高宮まで参進する際に道楽を取り入れ、太宰府天満宮神職が奏でる雅楽の調べの中一行は進んだ。

昨年同様、多くの参拝者が詰め掛け、松明、提灯の明かりが灯されただけの浄闇の高宮祭場で「悠久舞」が奉奏されると、一同感動した様子であった。

▲今年より「道楽」を取り入れました

△神島宮司による祝詞奉上(高宮神奈備祭)

各奉仕者は下記の通り(敬称略)

◆氏子会奉幣使

高取　利行(宗像市泉ヶ丘)

◆沖津宮 神迎え神事奉仕船

沖　津　丸(宗像漁協大島支所・沖西豊幸)

◆みあれ祭 奉仕船

沖津宮御座船

第二共進丸(鐘崎漁協・宗岡　譲)

中津宮御座

第二宮一丸(宗像漁協大島支所・藤島誠治)

辺津宮御座船

健　栄　丸(宗像漁協神湊支所・三苫健二)

沖津宮先導船

豊　栄　丸(宗像漁協神湊支所・永島一清)

中津宮先導船

福　寿　丸(宗像漁協地島支所・立石　智)

花　火　船

第三海漁丸(宗像漁協大島支所・沖西一宏)

報　道　船

み　た　け(宗像漁協大島支所船)

◆陸上神幸奉仕車

御座車

㈱新出光

西久大運輸倉庫㈱

宗像地区タクシー協会(みなとタクシー㈱)

先導車

宗像観光協会(国民宿舎ひびき)

宗像地区交通安全協会

宗像市消防団第十一分団

供奉車

宗像市消防団第十二分団

玄海ホテル旅館組合

◆主基地方風俗舞奉仕者

〈舞方〉中野正徳、清水陽介、八尋省吾、鎌田真史

〈歌方〉大森裕春、花田安輝、石津典秀、吉田敏幸、吉武倫彦

◆流鏑馬射手奉仕者

宮木光広、木稲修一、木稲貴史

◆浦安舞奉仕者

岩佐侑香、中野美菜、嶺日香里、吉井恵梨(玄海中二年生)

表千家奉仕 献茶祭斎行

木立の緑も色づき、秋の深まりをいよいよ感じさせる十月十七日、当大社秋の恒例神事献茶祭が、第十四代表千家々元而妙斎千宗左宗匠直々の奉仕により厳粛に斎行された。

この献茶祭は、昭和三十七年当時の宗像大社復興期成会々長出光佐三氏の御尽力により実現、第十三代表千家々元即中斎千宗左宗匠が初めて奉仕されて以来、毎年出光興産株式会社奉納により行われ、今回で四十三回目を迎える。

祭典当日は、穏やかな秋晴れの天候に恵まれ、早朝より県内はもとより山口・九州各県の同門会員をはじめ茶道に勤しむ人々が参集、神苑は和服姿の女性達で華やかな雰囲気に包まれた。

定刻十一時一鼓を合図に奉仕神職、第十四代表千家々元以下介添の家元関係者、出光興産株式会社名誉会長出光昭介氏、同門会関係者は祓舎にて修祓を受け本殿へ参進、所定の座に着座し祭典開始。

斎主が茶道の興隆と「茶の聖・千利休」の正統を受け継ぎ、四百余年の伝統を誇る表千家の隆昌と同門会の繁栄を祈念する祝詞を奏上、続いて献茶の儀が執り行われた。千宗左宗匠は拝殿に設けられた風炉前に端座し、切柄杓の手許、袱紗さばきも鮮やかな「動と静」とが見事に調和した、淀みない清らかな御点前が披露され、参列者は固唾を呑み、真剣な眼差しでその一挙手一投足を見守った。咳一つない静寂の中、点てられた濃茶・薄茶の二服が、雅楽の調べが流れる中、神職の手により御神前に奉献され、宗像大神の神慮をお慰め申し上げた。

献茶の儀に続き、斎主、家元、出光昭介名誉会長、同門会代表者が各々玉串拝礼を行い、一時間余に及ぶ本年の献茶祭も厳粛裡に滞りなく終了した。

祭典後、参列者は儀式殿に設けられた「出光副席」、斎館に設けられた「同門会副席」へ参席、茶席に揚げられた掛軸・茶道具の逸品を観賞しながら、お茶を戴き「侘・寂」の境地に浸り、至福の一刻を楽しんだ。

△祈りを捧げる出光昭介氏

平成十八年度 神道国際友好会総会

去る、十月十日宗像の地に於いて、平成十八年度神道国際友好会（会長・熱田神宮宮司小串和夫）総会が開催された。

同会は、熱田神宮に事務局を置き、全国各地の神社・個人等の会員で組織され、世界の宗教・文化の実情を把握しようと、海外宗教視察や各宗教界、学術団体との交流を深め、世界平和に寄与すると共に、会員相互の研修・親睦を目的に積極的に活動を行っており、年に一度各地にて総会を開催している。

十日、約二十名の会員が遠路次々と参集、勅使館にて各自受付を済ませ、午後三時三十分本殿にて正式参拝、小串会長の玉串拝礼に合わせて全員拝礼した。参拝後本殿をバックに記念撮影を行い、神宝館を当社学芸員の案内説明のもと拝観した。次に一同は総会々場の玄海ロイヤルホテルへ席を移した。

会員各自同ホテルのチェックインを済ませ直ちに会議を開催。開会の辞の後、小串会長の挨拶が行われ、続いて当大社神島宮司が歓迎の挨拶を述べ、早速議事に入った。

議事は最初に全員一致で小串会長を議長に選出、小串会長の進行により、昨年度の事業並びに会計報告が事務局よりなされ一同了承。次に今年三月に行われた第三十五回神道海外交流アメリカ宗教事情視察研修の報告が松山幹事長（東京大神宮宮司）より行われた。続いて事務局より提案の次年度事業計画案について審議がなされ、平成十九年三月八日～十五日の日程でインド宗教事情視察を行うことを決定し、総会は滞りなく終了した。

総会終了後、神湊の魚屋別館へ移動し懇親会が催され、一同玄海の新鮮な海の幸に舌鼓を打ちながら和やかな楽しい一刻を過ごした。

翌十一日、朝食後一同貸切バスにて宗像の地を後にし、古都太宰府へと向かった。

太宰府の地を森弘子女史（太宰府天満宮森禰宜夫人）にご案内戴き大宰府政庁跡、観世音寺を見学。次に太宰府天満宮を正式参拝し、同天満宮西高辻宮司ご案内のもと、昨年十月に開館した九州国立博物館を拝観した。折しも当日は開館一周年記念特別展『海の神々』展の開催期間中であり、全国津々浦々に祀られた神々へ捧げられた御神宝が約五百点、かつてないスケールで展示されており、古来我が民族の神への畏敬の念の深さが形として垣間見ることができ、一同感動を胸に博物館を後にした。太宰府にて昼食の後福岡空港、博多駅にて散会。平成十八年度神道国際友好会総会の全てを終了した。

刀剣展開催

宗像大社刀剣展が九月二十三日から十月二十二日の一ヶ月間、神宝館で開催された。

今年で十九回目を迎える刀剣展は、当社所蔵品を始め、県下の愛好家から協力を賜り、毎年六十振の刀剣が展示される。六十振の刀剣が一堂に会する機会は、県下でも珍しく貴重な展示会となっている。本年度も鎌倉中期から現代に至る作品が展示された。

総体的に見ると鎌倉期の刀剣に名品が多く、その中の一振には、刀身の棟という部分に、斬り合った時に出来たと考えられる疵が残っていた。現代では刀剣は単に美術品と見られがちだが、この様に当時は美術品という前に自分を守るための道具でもあり、生々しい疵を見ると想像力がかきたてられ、その時代の背景や、所持していた人に思いを馳せてしまう。これも刀剣鑑賞の醍醐味の一つであろう。愛好家だけでなく一般の人にとっても、各々の感性で楽しめる展示会であると思う。

その他にも香木で作られた珍しい鞘、人間国宝の方の作品、当社所蔵の伊勢神宮撤下神宝など、普段では、中々目にするこの出来ない品が多く展示され、本年も多数の方のご協力により、刀剣展は盛会裡に幕を閉じた。

福津市立津屋崎中学校二年生 職場体験学習行われる

去る九月十九日より九月二十二日までの四日間、福津市立津屋崎中学校二年生の女子五名を受け入れての職場体験学習が当大社において行われた。

この職場体験学習は、地域社会に視点を当て就職に関する知識を身につけ、主体的に進路を選択する能力などを育てる為に実施されており、福津市、宗像市内の各事業所にて行われている。

十九日午前九時、神前にて職場体験学習奉告祭が斎行された後、体験学習がスタートした。まず、白衣、袴の着装、たたみ方を当大社巫女より指導、普段着慣れない着物姿に全員困惑しながら境内の落ち葉の掃き掃除に御社殿の雑巾がけ等を行った。また、氏子会総代総会の見学では、神社と氏子の繋がりについて学習するなど普段できない貴重な経験となった。

三日目には、当大社並びに宗像についての歴史、境内の施設の説明を神職が行い、全員熱心に自分の生まれ育った宗像の歴史に興味をもち学習している様子であった。体験学習も後半となり、実践的な学習として本殿社頭にて巫女と一緒に参拝者へお守の授与等を行ってもらうと、慣れない作法・言動に緊張がみられた。

最終日には、神職により神社の祭典等で演奏される雅楽の生演奏を聴いてもらい職場体験学習の全日程を終了した。

この職場体験学習を通じて学んだ事がこれから先の人生の目標を決めていく上での一助となれば幸いである。

【体験学習者名】
福津市立津屋崎中学校二年生
宗岡　類　　浅井　理紗子
井上　歩美　　上原　誌織
西野　明香　　以上5名

やまえ水産 安部 實氏 大駐車場入口に社号標を奉納

秋季大祭前、祈願殿入口に樹齢一〇〇年を超える杉の大木で作られた「社号標」が、建立された。

これは神饌の魚をはじめ、直会用の鉢盛等を永年納入いただいている鮮魚店（有）やまえ水産の安部實氏と同夫人が奉納したもので、約一年をかけて神社職員手作りで製作した。

元々、当大社大駐車場入口付近には、トタン製の社号標が存在したが老朽化により二年前にやむなく撤去。当大社のシンボルたる入口の社号標は必要と考えていたところ、安部氏より金婚式の記念にご奉納したいとの申し出があり、実現した。

秋季大祭三日祭後には感謝状贈呈式が行われ、神島宮司より記念品と感謝状が渡され、「金婚式の良い記念になりました」と話されていた。

御夫婦の今後益々の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。

第36回 西日本菊花大会開幕 ～三、000鉢の菊花が境内を彩る～

本年も神郡の秋を彩る菊の祭典が、開催（～二十三日まで）されております。

この大会は全国で最もレベルの高い菊花展のひとつであり、九州各県や山口県の菊作り名人が一同に出品する大会で、大臣賞も内閣総理大臣を始め十一賞授与されております。

また出品作品の種類も非常に多く、大輪（だいりん）・盆栽・懸崖（けんがい）・小品盆栽（しょうひんぼんさい）・福助（ふくすけ）・ダルマ作り・丸作り・古木添え木・洋菊・自由花壇をはじめ、杉作り・千輪咲き・一文字作り・菊人形等のなかなか見ることのできない珍しい作品、さらに地元玄海小学校の児童達が丹精込めた作品等が出品されております。

境内では菊苗・菊鉢の販売、参拝記念品があたる「菊みくじ」、勅使館では喫茶休憩のできる「茶房（さぼう）」、宗像観光協会が行う屋台「いっぷく茶屋」が所狭しと行われております。

是非御参拝いただきます様、御案内申し上げます。

(続) 海の寄物

209

いしい ただし

第六回漂着物学会は北海道・襟裳岬の風の館が会場で、十月一四・一五日に行う。

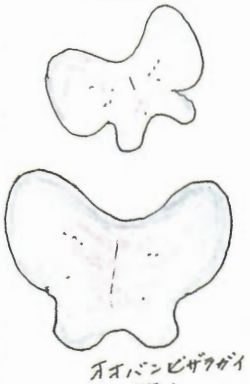
六月に襟裳へ下見に行った。六月というのに宿にはストーブが焚かれて驚いた。「ここは一年中ほとんどストーブが欠かせません」と宿の主人。

それに風速一〇㍍の風が吹く日が年間二九〇日を越えるという日本有数の強風地帯である。会場の「風の館」を見学。強風に耐えるような館で二十億円かかったとか。風を利用して「風力」で音を出す仕組みが通路にそってあり、不思議な音色に誘われて中へ、館は風に関するものは充実している。この館から襟裳岬が一望できる。岬の先端から岩礁地帯が二㎞にわたってつづいている。その絶景には感動する。この岩礁部にゼニガタアザラシが多い時には四百頭ほどいるという。ゼニガタアザラシは黒色の地色に、白色のリング状の斑紋が背にあり、これが穴あきの古銭に見たてたのが、和名の由来だという。北海道からカムチャッカ半島までに分布、国内では最大の生息地である。設置されている双眼鏡でじっくり観察もできる。

翌日はビーチコーミングで、近くの百人浜へ。南部藩の大型船が遭難し百人ほどの死者が浜へ漂着したところから浜の名がついたという。

黒ぽい砂浜が延延と続き、砂浜では軽トラが走り漂着している昆布拾いが行われていた。浜を注意して歩くと蝶のような貝殻がたくさん落ちている。正確にはオオバンヒザラガイの殻片で、蝶が羽根を広げたような姿に見える。表面は薄くピンク色をして、北海道の漂着物では人気がある。

ヒザラガイは玄界でも岩場にくっついているのを見かけるが、五、六㎝程の大きさで、少年の頃、これを見て化石だと思っていた。オオバンヒザラガイは、体長二〇㎝、体幅一〇㎝、老成したものは体長三〇㎝にもなるという。食用にもなる。アイヌ語ではムイとかメヨ。なおヒザラガイは「膝皿貝」と書き、岩からはがした時に腹の方からまるくこごまるようすが膝を曲げた状態にみたてたもので、地方ではジイガセ、背が曲った老人、磯ワラジも形からの名称である。多板綱で板を重ねたような殻片八枚をもっている。砂浜から岩礁部にすむオオバンヒザラガイは北海道以北に分布している。襟裳は何もない浜ではありません。



オオバンヒザラガイ 殻片

※九州国立博物館では、開館一周年記念特別展「海の神々」(捧げられた宝物)が十月八日から十一月二十六日(日)まで行われている。

展示は第一章から五章まで構成され、宗像大社・沖ノ島の神宝は「第二章 海の上の守り神」で展示されている。福津市・金刀比羅神社の難船図絵馬は文政十一年、大正十一年のものは、共に迫力満点である。終章に私の漂着物も十点ほど展示されている。小仏はスポットライトをあて、影が大きく浮きあがって、思わず「おっと」声を発した。国宝・重文を揃えた展示はまさに国博ならではの力であろう。

第五四三回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

福津市　若木台　野間　精一
図鑑には人里路傍の項あれば秋の草花をわれは確かむ

評　図鑑は植物図鑑、人里路傍は育生地のことと思うが、イヌタデ等でなく秋の草花という普通名詞の表記な処と共に今一つ歌意がはっきりしないのが惜しい。

うきは市　浮羽町　向　則正
人住まぬ実家の厨の板壁に母想ひいづエプロンひとつ

評　結句は「エプロン掛る」の方が生活実感があり、母恋いの情がより強く出る。

福津市　中央　池浦　千鶴子
ねずみもちの垣根の中にキジバトの巣ごもり見つけ目の合ひし日も

評　巣ごもりに必死の鳩の目が見えるようである。四五句は「巣ごもり見付ぬ目の合ふ時あり」の方が、よりリアリティーである。

宗像市　田久　巻　桔梗
献燈の苔剥ぎてみれば下の字の〈暦（れき）〉らしきのみかすかに読まる

評　「下の字の」は、苔の下か、最末尾の字のことか不明である。三句以下「暦らしく読まるる文字のかすかに残る」はどうだろうか。

宗像市　日の里　大和　美由紀
雨上がり青空となる放生会チャンポンの音宮に弾みし

評　このままでは文が終結しないので、初句は「雨晴れて」、結句は「弾みて」又は「弾めり」とする。

宗像市　東旭丘　天野　玲子
優勝の高校野球児のさわやかさ吾にも同じ孫のありせば

評　これも一首としての終結が無い。下句は「私の孫を重ねて思ふ」。

福津市　星ヶ丘　佐々木　和彦
前山の背後を通る白雲は夏の名残の輝きをもつ

評　折角の状景が各句共漢字漢語であり固い感じがするので二句を「うしろ」とすれば、大分やわらぐ。

宗像市　大井　木原　ふさ子
蜘蛛の囲にかかりし蝉の広げゐる翅が夕の風に音をあぐ

評　「音をあぐ」では、耐えられずに弱音を吐く、ようで翅が生き物のようである。「翅に夕べの風が音立つ」はどうだろうか。

宗像市　田野　森　甲子
川を隔て右に広がる大豆畑左は黄金の稲穂波打つ

評　「隔てる」は、仕切る、距離を置く、の意にもなるので初句は川を中に、川をはさみ、川を置き、などの表現を考えて見たい。

宗像市　大島　杉田　禮子
夕刊に連載中なる啄木の歌なつかしく切り取りて読む

評　「連載中なる」のなるでは破調だし理屈ぽいので素直に「連載中の」としたい。

宗像市　鐘崎　安永　久子
何人にも勝る言葉に安らぎぬ南主治医の診る目の優し

評　「言葉に」と思うを示す「言葉と」どちらが一首の内容にふさわしいだろうか。

福津市　在自　増田　武光
秋祭果てし社をひとり掃く老女に夜の霊気降りきて

評　いい歌だが、「降りきて」では、大和作品、天野作品と同じく文の終結がないので「降りくる」と終止形止めとする。

宗像市　池田　森　龍子
台風に引き千切られし木々の葉の陽に反（そ）りて青き落葉が走る

評　気持ちは判るが、下句は一寸無理な表現。「青きがままに乾反りて走る」とすればすっきりとする。

北九州市　八幡西区　竹内　結子
恋をしてお菓子に料理マスターしパンを焼いたら爆発「パーン」

評　爆発したのはパンのようでもあり、折角得た恋のようでもあり面白い。一、二句は「恋のわれお菓子と料理を」がいい。

選者詠

落蝉の二つ三つが晩夏（おそなつ）のゆだちの雨に浮きてながるる
散りがたの百日紅の枝にきて日没偈（にちもつげ）のごと法師蝉啼く
草取りをもう止したらと言ふごとくわが肩撫づるさるすべりの花

第五一八回 俳句作品集

宗像市　光岡　白土　凌一
彼岸花心洗うや赤い花

宗像市　東郷　田中　憲象
運動会勇み立ちたる撥捌き

福津市　在自　増田　武光
秋立つと笛吹童子募りけり

宗像市　日の里　花田いつ枝
腰ひょいと下げて茅の輪の肩車

宗像市東郷宗風社俳句会　吉田　杏子
古里は思ひ出ばかりしじみ蝶

三浦美千代
奥の院静かな夜や二日月

田中　雨葉
音あらく時雨打つなり古屋敷

木原　房子
噴水や白水蓮に音はげし

編集後記

当大社では十月一日より飲酒運転撲滅を願って、厄年や初宮、商売繁盛といった諸祈願祭後にお出していた御神酒が、ノンアルコールの甘酒に変更されました▼広く交通安全の参拝が多い故ですが、珍しい取組みとして新聞、テレビで思わぬ反響を呼び、全国中継もされました▼甘酒は醴酒と書き、古来より一夜酒とも言われており、米麹で発酵させたれっきとした酒であることには変わりません。当大社でも春秋の大祭時には、手間暇かけた神社で調製したものをお供えしてきた長い伝統もあります▼人間関係の潤滑油とも言われるお酒ですが、飲酒運転ほど軽い気持ちで犯す犯罪もありません。くれぐれもご注意下さい。（M・O）

発行所　宗像大社社務所
宗像会
〒811-3505　福岡県宗像市田島
電話　0940-62-1311（代）
発行人　伊藤佳和
編集人　大塚宗延
制作　ゼネラルアサヒ
印刷　ゼネラルアサヒ
定価1年送料共1,000円